

# 和歌山地域の学校におけるSDGsのカリキュラム化について

## —— ESD for SDGsコンソーシアムの構築に向けた事例報告 ——

### SDGs Curriculum in Schools in Wakayama :

#### A report toward the establishment of the ESD for SDGs Consortium

岡 崎 裕

OKAZAKI Yutaka

(和歌山大学大学院教育学研究科教職開発専攻)

2022年7月19日受理

### 抄録

本稿は、和歌山大学教育学部がすすめる共同研究事業「和歌山大学を中心としたESD for SDGsコンソーシアム推進」に関し、この研究活動に加わる学校でのSDGsに向けた教育の推進に向けた取り組みを、中間的に報告することを目的とする。プロジェクト自体の狙いはSDGsに関わる教育実践を行う学校の組織化と、教育情報の共有システムの構築であり、これらを通じて相乗的に地域全体としての質の向上を図るものである。ここでは、このプロジェクトに位置づけられる複数の学校における実践事例について報告し、さらにこれに連なる新たな可能性を持った取り組みについて外観しながら、SDGsに向けた教育の今後の方向性を探るものである。

**キーワード：**SDGs、ESD、地域連携

#### 1. はじめに

和歌山大学教育学部では、学部附属学校並びに和歌山地域に所在する公立学校との共同研究事業をすすめている。ここにいう「共同研究」は、和歌山大学教育学部教員が研究代表者となり、連携諸学校とそこにおける教育活動現場をフィールドとして現代的な教育研究テーマを設定し、和歌山大学教育学部の大学生・大学院生、学校現場の教員と共同して実践的研究に取り組む連携事業である。こうした学校現場との連携による実践的教育課題を対象とした研究に取り組むことで、地域づくりと地域教育の活性化に貢献し、同時に学生・院生の実践力の育成につなげている。

「和歌山大学を中心としたESD for SDGsコンソーシアム推進」プロジェクトは、2020年度の前記共同研究事業の一環として、和歌山大学教育学部と同附属中学校(2021年度からは附属小学校も参加)を起点に、和歌山県と県周辺域(和歌山地域)に所在する学校と連携をすすめつつ、SDGsに向けた教育推進を目指す学校実践のための共同研究の枠組み「和歌山ESD for SDGsコンソーシアム」を組織し、それぞれの成果をネットワークとして共有することで、相乗的に全体としての質の向上を図ろうとするものである。

本稿では、このプロジェクトの一環として実施された複数の実践について中間報告としての取りまとめを行い、本プロジェクトの目的である、SDGsに向けた教育の日本の学校現場における展開の可能性について、

一定の方向性を確認することにする。

#### 2. SDGsについて

##### 2.1 持続可能な開発のための2030アジェンダ

SDGsは、“Sustainable Development Goals”の略であり、日本語では「持続可能な開発目標」と訳される。これは本来、国際連合加盟国による国際的合意であり、その根拠は、2015年9月25日の特別総会「SDGsサミット」で採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ(Transforming our world: the 2030 Agenda for Sustainable Development)」に依る。これは、図1に示すように、貧困の撲滅から各ステークホルダーの連携・協調に至る、17項目にわたる到達目標に関し、西暦2030年を目途に一定水準の解決を目指す意欲的な声明である。



(図1)

この合意は、2000年に同様の形態によって合意された「ミレニアム開発目標 (MDGs: Millennium Development Goals)」が、当初計画に基づいて2015年に一旦終結することに伴い、併せ2005年から2014年までの10年にわたって展開された「持続可能な開発のための教育の10年(Decade of Education for Sustainable Development)」の継続の流れを受け、それまで国際連合が歴史的に取り組んできた「平和」「人権」「民主主義」などの諸課題について、網羅的かつ包括的に取り込みながら、当時の国際関係の中で、国連加盟各国のギリギリの調整の結果合意された成果でもある。

## 2.2 学習指導要領における位置づけ

SDGsの17項目にわたる目標には、教育に直接関わる項目も存在する。4番目の“Quality Education(質の高い教育をみんなに)”がそれにあたるが、そもそも、ほとんどの目標が、「国際理解教育」や「開発教育」、「環境教育」など多くの教育分野においてこれまで取り扱われてきた内容であり、それらは、国際連合の教育科学文化機関、即ちUNESCOが、国際社会において展開する教育活動のなかで追求してきた課題でもある。そうした文脈のなかでUNESCOは既にSDGs教育の推進に向けたデータベースの整備を進めている<sup>1)</sup>。このように、教育の分野においても国際的潮流と言えるSDGsに関し、我が国の教育行政は、どのように対応しているのだろうか。この点に関して2022年度に全面实施を迎える新学習指導要領を題材として、その状況を確認したい。

新学習指導要領では、その前文をはじめとして、複数箇所にもわたって持続可能な開発(Sustainable Development)に関して言及している。

これからの学校には、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。このために必要な教育の在り方を具体化するのが、各学校において教育の内容等を組織的かつ計画的に組み立てた教育課程である。

(文部科学省「小学校学習指導要領」前文、平成29年3月)

上記は小学校学習指導要領の前文に見られる記述であるが、学校教育のそもそもの課題として「持続可能な社会の作り手」の育成が宣明されており、幼稚園、及び中学校の指導要領においても同様の記述がなされている。

さらに本文中にも関連する記述は存在する。下記は「総則」部分に記されたものである。

### 【総則 第1 小学校(中学校)教育の基本と教育課程の役割】

3 2の(1)から(3)までに掲げる事項の実現を図り、豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待される児童に、生きる力を育むことを目指すに当たっては、学校教育全体並びに各教科、道徳科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動(中略)の指導を通してどのような資質・能力の育成を目指すのかを明確にししながら、教育活動の充実を図るものとする。

このほかにも、「社会」、「理科」、「家庭」など教科課程に関する記述の中にも「持続可能」性に関する言及が見られる。このような一連の「持続可能な…」という表記は、言うまでもなく原語となる“Sustainable”を受けたものであり、ESD(Education for Sustainable Development)と同じ文脈として、これまで文部科学省が国際統括官付を中心に進めてきた取り組みの延長上にあるものである。こうした状況に合わせ、文部科学省では、学校におけるカリキュラムの作成や集約、さらに担い手育成に関するシステムづくりなど、既に多様な事業に着手しており、その意味で、SDGsに向けた学校教育の取り組みは、文部科学省にとって伝統的な国際理解教育の一環となりつつあると言える<sup>2)</sup>。

## 3. ESD for SDGsコンソーシアムについて

和歌山大学では、第3期中期目標において「附属学校3校が連携し、『多様な特性のある児童・生徒が共に学びながら』(インクルーシブ教育)、『21世紀の社会を生きるうえで必要となる資質・能力』(21世紀型能力)を高めるための教育について学部・大学院との共同研究を行う。その成果を、和歌山県域における地域特性を活かした『持続可能な社会の担い手育成』(ESD)のための先進的教育モデルとして、地域の学校に提供する。」としている。こうした大学としての方向性に鑑み、教育学部における地域連携のための共同研究事業のひとつとして「ESD for SDGsコンソーシアム」プロジェクトに着手した。ESD: Education for Sustainable Development と SDGs: Sustainable Development Goalsは、持続可能な開発に向けた教育活動とその到達点の意であり、言わば「手段」と「目的」の関係にある。こうした認識のもと、和歌山大学教育学部ならびに同附属学校においては、国際的にも明確かつ具体的な目標(SDGs)に向けた教育活動(ESD)を進めることとした。

ここに言う「共同研究」事業は、「和歌山大学教育学部教員が研究代表者となり、和歌山大学附属学校および和歌山県下・大阪府下の公立学校をフィールドとして、現代的な教育研究テーマを設定し、和歌山大学教育学部の大学生・大学院生、学校現場の教員と一緒に共同して実践的研究に取り組む連携事業」とし

て位置付けられており、その目的を「学校現場と連携して実践的研究に取り組むことで、地域づくりと地域の教育の活性化に貢献し、また学生・大学院生の教育的実践力の育成につなげていくこと」として位置付けられている。こうした流れを受けて、共同研究のカウンターパートとして、広く和歌山県域において参加校を募りながら、「和歌山ESD for SDGsコンソーシアム」を組織し、研究を深めることとした。ただ、2020年度、及び2021年度においては、新型コロナウイルス感染症の影響により、和歌山大学附属中学校における実践、並びに一部の連携校における実践は行われているものの、実際の連携(ネットワーク)、ならびに知見の共有については未だ道半ばの状態であり、今後、当初の目的に向けて、さらなる発展を期待するところである。

#### 4. コンソーシアムを構成する学校におけるSDGsに向けた取り組み～ケーススタディ

##### 4.1 和歌山大学教育学部附属中学校における実践

和歌山大学教育学部附属中学校では、SDGsを柱とした総合的な学習の時間「和歌山×SDGs」の取り組みを、2019年度に開始している。中学校の3年間で「持続可能な社会の実現に向けて、自分たちに何ができるか」を探究し、実際にプロジェクトを企画・実施していく取り組みである。「和歌山×SDGs」では「変化の激しい社会に対応して主体的によりよく問題解決する資質や能力」と「一人一人が持続可能な社会の担い手として、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長をめざす価値観」を育むことをめざしている。ここではその初年度の取り組みについて紹介する。

半年間の準備を経て、2019年10月より「和歌山×SDGs」の学習が開始された。初期段階においては、同年「SDGs未来都市」として選定された和歌山市の担当職員から市としての取り組みに関する講演を受け、さらに「和歌山ユネスコ協会」の事務局長の方からの話を聞いている。このほかJICA(国際協力開発機構)の国際協力推進員の方々によって、ワークショップの形式で、途上国支援の実務に基づいた「SDGsの視点から見た世界の課題」に関する講演が実施されている。こうした一連の学びを「事前学習」として位置付け、「SDGs」についての基礎を学んだ後、生徒たちは数名のチームに分かれて、和歌山で持続可能な社会をめざす取り組みを行っている多くの事業所を訪問取材し、地域の現状と課題について学ぶこととなった。初年度は1年生全140名が36の班に分かれ、和歌山県内にある38の事業所を訪問している<sup>3)</sup>(表1)。

(表1)

	A組	B組	C組	D組
1班	アートサポートセンターRAKUの取り組み	中川工作所の取り組み	小久保工業所の取り組み	日本製鉄和歌山製鉄所の取り組み
2班	大日本除虫菊の取り組み	日本赤十字社和歌山医療センター国際医療救護部の取り組み	和歌山イコール会議&和歌山県男女共同参画センターの取り組み	NPOわかやま環境ネットワークの取り組み
3班	JTの取り組み	NPO法人ワンプル二度目の命の取り組み	島精機製作所の取り組み	ヴァイオス桃山リサイクルセンターの取り組み
4班	小西化学工業の取り組み	東洋ライスの取り組み	大栄環境株式会社粉河リサイクルセンターの取り組み	太洋工業の取り組み
5班	花山温泉の取り組み	「熊野古道」を世界遺産に登録するプロジェクト準備会の取り組み	和歌山自然エネルギー発電株式会社	和歌山県国際交流センターの取り組み
6班	紀陽銀行の取り組み	紀ノ川農協の取り組み	株式会社オークワの取り組み	子どもの生活支援ネットワークこ・はうすの取り組み
7班	紀南電設の取り組み	花王の取り組み	スターバックスコーヒーの取り組み	きのくに信用金庫の取り組み
8班	NPO法人人と自然とまちづくりの取り組み	きのくに子どもNPOの取り組み	和歌山ユネスコ協会の取り組み	「ワカセマヤモリ会」「紀州まちづくり会」の取り組み
9班	PETERSOXの取り組み	東京大学生産技術研究所加太分室地域ラボの取り組み	和歌山生協のSDGsの取り組み	和歌山県JA女性組織連絡会の取り組み

授業計画の流れとしては、インタビューをもとに個々の課題をまとめ、その後、生徒によるそれぞれの解決策を検討した上で、実際に各事業所に提案することを想定していた。ただ、その後のコロナ禍の拡大により、事実上計画は中断し、これが再開するのは翌2020年の秋まで待つことになる。

##### 4.2 田辺市立上秋津小学校の取り組み

田辺市立上秋津小学校では2020年度から、総合的な学習の時間を中心にSDGsに向けた教育課程の改革に取り組んだ。この実践では、中心となった松本桂教諭が和歌山大学大学院教育学研究科教職開発専攻(教職大学院)の学生として行なった実践研究としても位置付けられており、構造上、和歌山大学と上秋津小学校との共同による研究活動とすることができる。

研究報告の抄によれば、「本研究は、ESD教育及びSDGsの視点を取り入れた教育課程の見直し、SDGs達成を意識した総合的な学習の時間の授業改善を学校全体で行った研究」であり、さらに「SDGs達成を総合的な学習の時間の大きな目標に掲げることで、児童は、自分が考え行動しなければ問題を解決できないことに気づき、解決へ向け動くことによって自分の学習と生活が地域、世界への貢献へとつながることを体感できた。また、教師にとってもSDGsを学習に取り入れることにより、教科横断的な学びの重要性に気づき、授業改善へとつながった」と結論づけた。その後、学校全



体としての取り組み、児童の学びに向かう主体性の重視、地域(Local)と世界(Global)に向かう視野、そして教師にとっての気づきなど、複数の視点のなかで研究活動は進められている(図2)。



(図2)

本実践の特徴としては、地球環境や国際関係など、視点が外に向かいがちなESDやSDGsに関する取り組みにおいて、小学生としての生活圏を意識したLocalな視点に特に力を入れていたことである。梅やみかんなど地域の農産物生産に関する学習、少子化の流れの中での持続可能性に関する課題など、地域の課題に正面から向き合い、小学校教育としての視点から教材化、カリキュラム化をすすめている。なお、この研究は翌年度以降も継続されている。

## 5. ESD for SDGsコンソーシアムの今後の展開について

先にも述べたが、2019年度に開始した本事業にとって、コロナ禍は正面から大きな影響を与えた。当初想定した、本来の目的である、和歌山県域におけるコンソーシアムの形成(SDGsに向けた教育実践校のネットワーク化)は、残念ながら十分に進んでいるとは言えない。ただ、この間にも特記すべき進展もある。2021年度に入り、本事業とは別に筆者も加わって開始された、「南紀熊野ジオパーク探偵団」という取り組みがある。これは和歌山県知事を会長とする南紀熊野ジオパーク協議会による事業で、「南紀熊野ジオパークをフィールドとした探究活動を通じて、地元が抱える様々な課題解決に向け、自立的に考え行動する次世代を担う若い世代を育成するプログラム」として位置付けられている<sup>4)</sup>。2021年度は、海の環境保全、並びに海洋プラスチック問題に関する国際的比較研究に資することを目的として、和歌山県下の中学・高校生の参加を得て、2日間にわたってフィールドワークを実施した。白浜と新宮において行われた海岸でのフィールドワークには、近隣地域の5つの中学・高校から約40名の生徒と教員が参加した。それぞれの学校の多くは、これまでも環境教育や地域問題に取り組む実践をすすめてきた学校であり、今回の取り組みをきっかけとして今後、経験の共有が望まれるところである。ここに見られる

『地域』における『海の環境』保全、並びに『教育』における『パートナーシップ』の推進は、本質的にいずれもSDGsの目指す目標と重なるものであり、今後、ここでの参加校との協働・連携が望まれるところである。

このほかにも、コンソーシアムの拡大に向けては既に打診、並びに参加の意思を表明している学校が複数あり、次年度以降において有機的な情報共有を進められるよう体制を整える予定である。

## 6. おわりに

以上、和歌山大学教育学部による、和歌山県域諸学校との共同研究の成果からSDGsに向けた学校教育カリキュラムについて報告してきた。本論でも述べたように、こうした取り組みは、今後国際的な潮流の中で必然ともなりつつあり、共同研究事業の本旨たる、SDGsの教育実践にかかる情報の共有(データベース化)の体制構築は地域の教育を支える意味でも重要な意味を持つと考えられる。先にも述べたが、同様な試みは広島や奈良などそれぞれの地域ごとに進みつつあり、今後、そうしたエリア間のネットワークも含めて、取り組みを進めたいと考える<sup>5)</sup>。

## 参考資料・引用資料

- ・ United Nations General Assembly (2015) “Transforming our world: the 2030 Agenda for Sustainable Development”, United Nations.
- ・ 岡崎裕、山口康平、松本桂(2021)、「和歌山大学を中心とした「ESD for SDGs コンソーシアム」の推進」、『和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告書 2020』、和歌山大学
- ・ 南博、稲場雅紀(2020)、『SDGs—危機の時代の羅針盤』、岩波書店
- ・ 文部科学省(2017)、「小学校学習指導要領」、文部科学省
- ・ 和歌山大学(2016)、「第3期中期目標」、和歌山大学
- ・ 和歌山大学附属中学校(2020)、「和歌山×SDGs」1st stageインタビューリサーチ報告書『和歌山における持続可能な社会の実現に向けた取り組み2019』、和歌山大学附属中学校第1学年
- ・ 松本桂(2021)、「SDGs達成を意識した総合的な学習の時間～主体的にヒト・モノ・コトとつながる児童の育成～」、和歌山大学教職大学院

## 注:

- 1) 国連: SDGs公式文書(UN) UNESCOデータベース、UNESCO Associated Schools Network <https://aspnet.unesco.org/en-us>、国内データベース <https://www.unesco-school.mext.go.jp/aspnet/>
- 2) 文部科学省 教育現場におけるSDGsの達成に資する取組好事例集、[https://www.mext.go.jp/unesco/sdgs\\_koujireisyu\\_education/index.htm](https://www.mext.go.jp/unesco/sdgs_koujireisyu_education/index.htm)
- 3) 「和歌山×SDGs」1st stageインタビューリサーチ報告書『和歌山における持続可能な社会の実現に向けた取り組み2019』より

- 4) 南紀熊野ジオパーク <https://nankikumanogeo.jp> ーシアム」などがある。
- 5) 奈良県中心とした「近畿ESDコンソーシアム」(<https://kinkiesd.xsrv.jp>)、広島を中心とした「広島SDGsコンソ

※URLの参照日はいずれも2021年11月26日